

【参考作品】 六年生【 祭りと登校班

【はじめ】聞いたことをもとにした、工夫した書き出し

母は昔、私より小さいころに、祖母の地元の「じぞうぼん」に参加したことがあるそうだ。漢字で「地藏盆」と書くのだが、母は「児童盆」だと長い間思っていたらしい。なぜなら、それは子供のお祭りだったかららしい。地域ではかなり大きな祭りらしく、祖母は台所で料理を熱心に作っていたそうだ。路地にはカラフルなちょうちんがずらりとぶら下がり、人々はにぎやかで、そわそわしていたという。

【なか①】調べたこと 聞いたこと

気になって調べてみると、地藏盆というのは「地藏ぼさつ」の縁日で、お盆に近い旧暦の七月二十四日に行われるそうだ。ただし、寺院にまつられている地藏ではなく、道祖神信仰と結びついた道ばたや街角のお地藏さんが対象ということだった。しかし、「一口に「まつる」と言ってもいろいろなものがある。この地藏盆は、どうやるのだろうか。本番は夕方からで、かわいい花がらのゆかたを着せてもらった小さい母は、友達とつれだつて出かけていく。せまい路地はちょうちんの光でオレンジ色になっていて、そこをたくさんのゆかたをの子供たちが歩いて行く。いろいろなひらひらの帯で金魚の群れのようで、すごく美しかったそうだ。子供たちはみんなふくろを持たされていて、お地藏さまをめぐって歩いておかしをもらう。配ってくれるのは、近所の人たちで、ふくろの中にヤクルトや小さなラムネがしなどを入れてくれて、家に着くころにはふくろはパンパンにふくらんでいて、今にもちぎれそうなほどだったそうだ。こういう地域でやる、近所の人々とのふれあいの祭りは、今はほとんどないのではないか。私も一回や二回はあるが、こんな大規模なのではなかった。話を聞いて、なんだかハロウィンみたいだなと思った。その祖母の地元も、阪神大震災で火事になってしまい、近所の人々もバラバラになってしまったらしい。もうあのお祭りが開かれることもないのだ。

【なか②】新たに気づいたこと、考えたこと

こうして人々のふれあいが消えていってしまうと、なんだか悲しくなる。だが、私は気づいたことがある。私たちの生活の中にも、ふれあいがあるのだ。それは、学校の登校班だ。私たちのグループだけ、近所のおじいさん達が学校まで送ってくださるのだ。大きな横断歩道があるから危ないと、雨の日も風の日もボランティアで私たちを送ってくれる。学校の帰り道や休日でも道で出会うとにっこり笑ってあいさつをしてくれる。だから自分たちも小さな子供が一人で危ないことをしていたら、声をかけるだろうと思う。

【結論・まとめ】前とかわった自分の考え

母が経験したようなはなやかな祭りは少なくなつた。しかし、祭りはなくなつても、ふれあいはなくならないのだ。こうやって私も、私の子供も、その子供も、ふれあい助け合つていくのだろう。